

〈想像の共同体〉論批判

——〈世界単位〉の立場から——

高 谷 好 一*

“The Imagined Community”: A Critique from the Viewpoint of “World Units”

Yoshikazu TAKAYA*

The view of the “imagined community” that Benedict Anderson proposed in discussing the formation of the nation-state in Indonesia cannot be considered to be correct in that it overlooks two points. First, this region is not the homogeneous entity that Anderson considers it to be, since it consists of two world units, the Java World and the Maritime Southeast Asia World (Fig. 1). Second, Southeast Asia is a world of pantheism, where the force that attracts people takes the form of an electrode that emits a “point discharge” rather than the “canopy type” seen in Europe (Fig. 2 A, B).

はじめに

土屋さん、あなたは、ことインドネシアに関しては熱烈な国民国家擁護派でした。一方、生態派の私は国家なんてどうでもよいじゃないかなどと考えていました。この違いはお互いに了解していたのですが、ちゃんとした議論など一度もいたしませんでした。だが、今度あなたが逝ってしまってから私は、あなたの論文を読みました。それにあなたがよく推賞していたベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』も読みました。そして今、あなたは居ないのですが、これはやっぱり一度議論しておかねばならない、という気になって、この一文を書くのです。

あなたは、土屋健治編著『東南アジアの思想、その展開』のなかの「知識人論」で次のようなことを言っています。ナショナリズムが燃え盛っていたスカルノ時代には知的エリートは生きていた。だが、スハルト時代になると、彼等は口をつぐまされてしまった。それはいけない。知識人は再び、頑張っ、無告の民の世界に耳を傾け、彼等の世界を語らねばならない〔土屋

* 滋賀県立大学人間文化学部；School of Human Cultures, The University of Shiga Prefecture, 2500 Yasaka-cho, Hikone, Shiga 552, Japan

1990b : 331-332]。このあなたの主張には私も大賛成です。

だが、上のあなたの「知識人論」でも本当のことをいうと私は、もう一つ物足りないものを感じるので。私は上の文章の中に、例えば民族だのタナ・アイルなどという言葉を探したのです。だが、それは見出せなかった。たしかに、〈無告の民〉という言葉は出てきます。だが、文面から察するかぎり、それは「普遍主義的な理念」を知ったけれどもそれを言い出せない「無告の民」というふう聞こえます。それでは私は不満なのです。〈無告の民〉は普遍論理などというものよりも極めて個別な考え方を持っているに違いない、と思うからです。

多分、あなたは〈想像の共同体〉というものを中心に据えて、そこから話を進めたからそういうことになったのでしょう。私ははっきりいって、この〈想像の共同体〉論は曲者ではないかと思っています。そんな〈想像の世界〉よりも、実態のある故郷なり、〈世界単位〉があるのだ、というのが、私の素直な気持ちなのです。

叱正いただけないのが、残念ですが、私の考えている処を述べさせて下さい。

I 〈想像の共同体〉論

アンダーソンは、〈想像の共同体〉という発想をヨーロッパの事例から見出しているのですね。それは、次のような順序を経て作られた、とされています。① 王による重商主義の採用、② 地方語を話す役人達の登用、③ 地方語文化の拡大、④ 王の地方語文化への〈帰化〉、とあって、⑤ 国民国家の誕生があったというものです。こうして、国民国家というのは、元々はと言えば、王によって作られたものなのだが、一旦それが出来上がってしまうと、もう別のものになる。そこではお互いに見知らぬ人々が共同体意識を持つようになり、その共同体のためには命を投げ出すようにさえなるのだ、というのです。同氏は、こうして作られたヨーロッパの国民国家は一つの〈モジュール〉になり、やがて、世界中に広がっていった。インドネシアなども、まさにそれと同じ方法で作られた、というのです。

インドネシアの場合だと、このプロセスは次のように説明されています。

- 1) 元々の東南アジアにおいては、人々はジャワ語、スダ語、ミナンカバウ語、ブギス語、等々と全くバラバラの言葉話し、バラバラに生活していた。
- 2) そこにオランダがやってきて、全体を植民地にした。オランダは広大な植民地の統治をするにあたって、下級官僚養成を目的に学校を建てた。すると、そこに地方から優秀な若者達がやってきて、共に学び、卒業し、役人になって、地方を遍歴した。こうして、それまではバラバラだった所に、一つの共通の文化ネットワークが出来ることになった。
- 3) エリート達は例の「モジュール」を知ることになった。そして、自分達の国を作るという事に急転回していった。オランダ語にかえて、インドネシア語が代表地方語に選ばれ

た。オランダ語を使っていたエリート達はインドネシアに〈帰化〉した。かくして、植民地国家というネガはそのままインドネシアというポジに焼き付けられた。

以上が国民国家インドネシアの形成に関する説明ですね。そうしたことがあって、その後の国民国家は深化していく。その深化に関してあなたは次のように述べています。

国民と国家の至上性を示すシンボルが作られてきた。憲法、国旗と国歌、独立記念碑、英雄墓地、国会と大統領官邸、国立大学と国立図書館等々がそれである。これとともに、愛国歌と愛国教育をはじめ、「うるわしの祖国」を讃える営みが、官民をあげて行われてきている。この過程では、遠い昔の栄光があたかも現在に直結するかのようになされる。伝統的国家と国民国家とが溶接され、「想像の共同体」が歴史的な被規定性を離脱して万古不易の永遠の相貌を帯びるのである。ここでは、国民国家がかつて王と王宮がそれを果たしたように、時間と空間の形を示しこれに意味を与える至上の主宰者となる。ひとがそこで生まれそこで死ぬこと、つまり、そのために生まれそのために死ぬその至上の単位、無私と献身の至高の対象となるのである [土屋 1990a : 278-279]。

あなたやアンダーソンの説明はたしかに一面では筋が通っています。だが、私には、外来の〈モジュール〉がそんなにも簡単に移植しうるのだろうか、というところに大きな疑問を感じるのである。伝統的国家と国民国家の溶接がそんなに簡単にいくとは考えられないのです。

II 「世界単位」の考え方

私はかなり基本的な所でアンダーソンの考え方には反対です。第一、事実においても彼は誤りを犯していると思うし、第二に、仮にそういう考え方があったとしても、世の中、そんなふうに進んでいって困ると思うからです。詳しい議論は後にしますが、こういうことです。

アンダーソンはナショナリズムの昂揚に対して、言語を共有することの重要性、とりわけ、斉唱された時の威力を主張しています [アンダーソン 1987 : 249]。そのことは認めます。だが本当に、例えば、その斉唱の時、彼等はインドネシア語でその情景を思い浮かべているのでしょうか。ひょっとしたら、ジャワ語やブギス語で思い浮かべているのではないのでしょうか。同じ問題はタナ・アイルという言葉についても考えられるのです。インドネシアの人達は何かという、タナ・アイルという言葉を使います。自分達の国と言う時に、タナ・アイルといいます。私はここにひっかかるのです。彼等はタナ・アイルという時〈想像の共同体〉である国家を思い描いているのでしょうか。そうではなく〈風土〉をイメージしているのではないのでしょうか。ここの所にひっかかるのです。

この種の問題に関しては、すでにいろいろの議論もあるようです。例えば、ウォーカー・コナー [1995] の議論がそれです。宗教や歴史等といった文化的な要因を絆にして結ばれた〈想

像)の集団とは別に、出自を絆とした集団というのがあって、それへの愛着は結局は無視し得ないとコナーは主張しています。私は同氏の考え方に賛成です。ただ、私は彼の言う〈出自の絆〉とは少し別のものを考えています。私は人々は socio-cultural-eco-dynamic に結ばれた集団を作っており、それが大変強力なものとして持続していると考えているのです。もっと簡単に言ってしまうと、eco-logic に結ばれた集団が大事だと考えているのです。そうした集団の作る地理的範囲を私は「世界単位」と言っています。

〈世界単位〉のことを具体的に考えてみましょう。私は東南アジアならびにその周辺には図1に示したような〈世界単位〉があると考えています。図にはこの地域に存在する全ての〈世界単位〉が示されているわけではありませんが、代表的なものを示しています。これらの〈世界単位〉はそれぞれに皆、固有の性質を持っているのですが、どれもこれもそれなりの社会文化生態的な入れ籠構造になっていて、なかなか壊し難いものになっています。その強靱さは、言ってみれば宿命的とさえ感じさせるほどのものです。

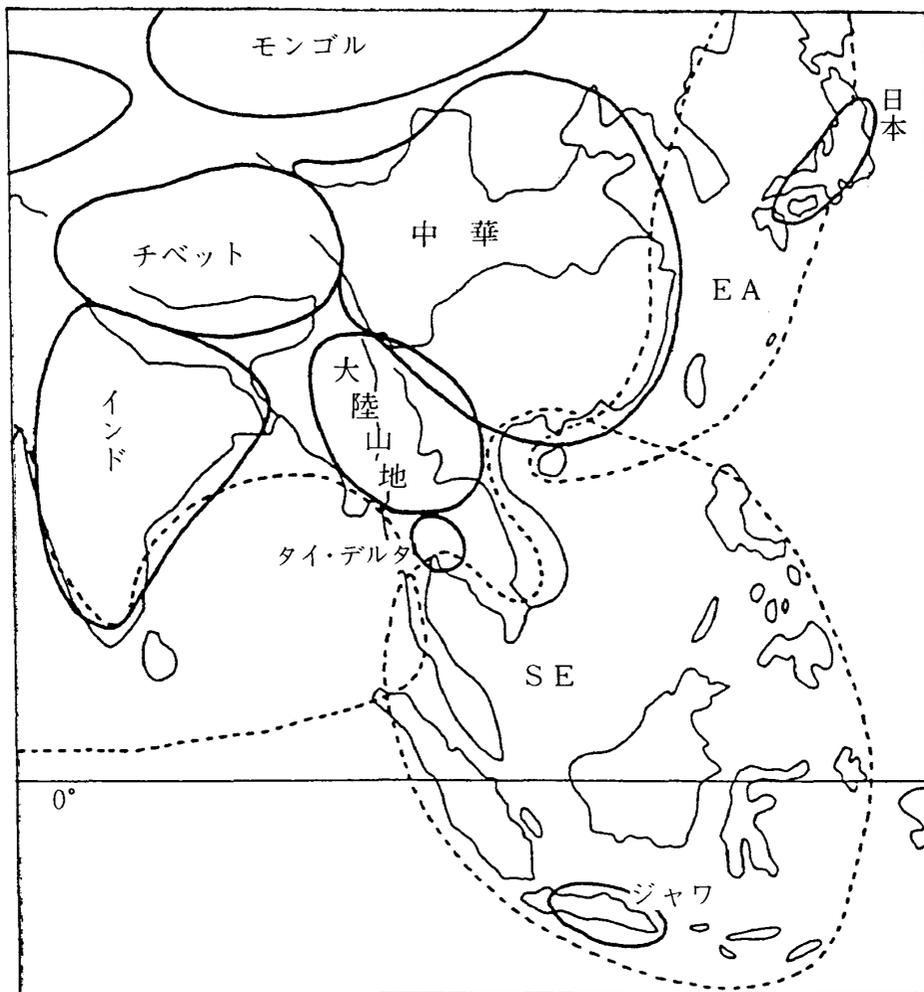


図1 東南アジアならびにその周辺にある〈世界単位〉

ここではジャワ世界というものが一つの〈世界単位〉になっています。ここは火山山麓を中核とした世界です。年中高温多湿で瘴癘の熱帯にあって、ここだけは特別住み良いところ。オーストラリアの島陰になっていて、降雨量も少ないのですが、それ以上に、山腹の風当たりの良さがこの居住環境の良さを作っているのです。加えてここは肥沃な火山灰土壌と、高みから流れ下る谷川の水が豊富なために、農業にも好適な条件を備えています。こういうことがあって、ここは古くから人が多く住んできました。おかげで今ではそこは見ただけでも高い熟成度を感じさせる所になっています。どの家もこんもりと茂った屋敷林の中にあり、その屋敷林は果樹や野菜や薬草がキッチリと植えられています。それは荒々しい自然がまだ残る周辺の島々、例えば、スマトラやボルネオなどとは全く違ったものです。そして、この熟成は景観だけではありません。社会や文化にも及んでいます。社会は階層化していて、人々は階層に従った立ち居振舞いをいたします。数多い段階に分かれた敬語などもその一例です。そして、いかにも伝統の中で磨き上げた芸術があります。ワヤンなどはその例でしょう。演ずる芸術家の方だけでなく、それを楽しむ方の観客がまた、その固有の芸術を、言ってみれば、自分達の生活の一部としています。要するに、ここには、いかにもジャワ的な世界というのがあるのです。それは、周辺の熱帯多雨林で覆われた外領とは全く別のものなのです。だから、私は、これを固有の一つの世界として括り出し、一つの〈世界単位〉としている、ということなのです。

ここでは詳しくは説明する余裕がありませんが、同じように、別の生態の上には別の生業があり、別の社会が存在していることを申し添えておきたいと思います。例えば、熱帯多雨林の上には焼畑集落が散在し、そこにはジャワなどとは全く違った社会が出来ています。19世紀後半になって開けたデルタにはまた、いかにも開拓地的な水田農家が展開します。それで、これらを私はまた別の〈世界単位〉とするのです。

ところで、この〈世界単位〉も本当は一筋縄では参りません。今までに見てきた〈世界単位〉はいずれも基本的には、一つの生態の上には一つの生業が乗り、そこにはそれに応じた社会が出来、文化が発達するという具合のもので、比較的捉え易いものなのですが、この地球上にはそんなものばかりでもないようなのです。全く違う原理で独自の世界を作っているところもあるようなのです。今のところでは私は、あと二つの類型があらうかと考えています。

そのうちの一つは、例えば、シンガポールのようなものです。ジャカルタもそういうものの一部だと思います。これらはいずれも港です。そこには、前に見たような生産基盤としての生態というようなものはありません。生態ということになると、それは海であり、汀線だということになります。そこで、交易という生業が行われているのです。そして、いわゆる港社会が作られ、港文化とでもいったものが発達しているのです。

ところで、この種の港の〈世界単位〉はそれを地図の上に明示しようとする、例えば、ジャワ世界やデルタ世界のように描けないのです。私はシンガポールとよく似た港をマラバール

海岸でも、ペルシャ湾でも見ているのです。中国の沿岸都市や日本の港にも同じものを感じます [高谷 1994]。こうなると、その広がりには地図には示せないのです。地図に示すとすると、港という点をつらねてどこまででも広がっていくものになるわけです。あるいは、その交易網を中心に描くと、それはクモの巣状のものになり、際限なく広がっていくのです。こんな次第で、これは、ジャワ世界などとは全く違うということになるのです。それで私はジャワのものを仮に〈生態型の世界単位〉と名付け、港の方のものを〈ネットワーク型の世界単位〉と名付け、両者を区別しています。要するに、両者は〈世界単位〉を作る仕組みが全く別のものということになるわけです。

中国とインドを考えてみた時、私は、ここでまた、先の二者とは違う地域形成の仕組みのあることを発見いたしました。中国の場合は儒教という思想が中華世界を作っていることを発見したのです [高谷 1993]。ジャワに比べたら100倍もありそうな、この範囲はそれぞれ多様な生態と生業を含んでいます。それにも関わらず、ここには中華世界という、ひとつのまとまりが出来ている、と私は考えたのです。そして、それは他でもない、儒教という大思想がこの世界を纏めあげているからだと考えたのです。同じ様なことをインドの場合にも考えました [高谷 1994]。ここではヒンドゥ教というものが、このインド世界を作っているのです。ここでも、この大思想は生態や生業の差を越えて、一つの〈世界単位〉を作っています。それで、中国やインドに見るような、こういう大文明圏とでもいうべきものの作られている所は、これまたその仕組みが全く違うものだと考えて、これを〈大文明型の世界単位〉としたのです。

さて、もう一度、先のコーナーの〈出自を絆とした集団〉に戻りますが、同氏によると、その出自というのは決して狭義のものではないようです。同氏によると、それは、人々が主観的にそうだと確信しておればそれでよいようです。こうなってくると、これは私が言っている〈世界単位〉にかなり接近して来ます。ただ、私の方は、コーナーよりも、更に生態を重く見ているのです。それに、コーナーは総論的に述べているのですが、私は地図にそれを示してみているのです。

私の理解は、地球上にはこういう〈世界単位〉が宿命的ともいえる息の長さで存在し続けている、というものです。そして、そうした実態の上に、ときどき、かなり広い範囲に、いわば流行病のように、“普遍的論理”というものが覆い被さってくる、という考え方です。その流行病が、固有の〈世界単位〉に全く影響を与えないなどとは私は決して申しません。ただ、〈世界単位〉というのは、そんなに易々とその根底から崩れるものではない、ということをおきたいのです。

III 伝統を生かすタイ国

〈想像の共同体〉論からすると、ヨーロッパの列強が植民地の官僚組織を作り上げてくれなかったら、東南アジアの国民国家はあり得なかった、といったことにもなりそうなのですが、本当にそうだったのでしょうか。ずっと昔から東南アジアには伝統的な王国があり、それが今日の国民国家を作る時の最も重要な核になった、というふうには考えられないのでしょうか。あなたの言う「伝統的国家と国民国家との溶接」の実態をもう少し詳しく見てみましょう。

インドネシアの例ではありませんが、タイの場合を見てみましょう。タイの王家は19世紀の中頃までは、先に見た〈ネットワーク型世界単位〉の中の一員で、一つの港の経営者でした。東南アジアの物産を中国人商人を利用して中国に運んだり、オランダなど、ヨーロッパ商人に港湾使用を許したりして、それで金儲けをしていたわけです。いわゆる海商であったのであり、領域国家など作っていませんでした。ラーマ4世はまだ、自分のタイトルを「シャムのバンコクの首都ラッタナコーシン・マヒンドラユタヤー市の河川流の所有者」としていたといえます [矢野 1990]。

この王国はちっぽけなもので、当時のヨーロッパ人の目からみれば取るに足りないものにしか過ぎなかったかも知れません。しかし、私達は決してこれらを無視してはならないと思うのです。何故なら、現に国威を發揚している今日のタイ国は、まさに、このちっぽけな河川流の所有者の直接的な發展形であるからなのです。ちっぽけな河川流の所有者はヨーロッパ列強が現れ、彼等が通商と開田を求めた時、実に的確に対応いたしました。通商はともかく、デルタの開田は彼等には全く経験の無かったものなのです。それにも拘わらず、見事にそれをやってのけました。最初、華僑の労働力を用いて開拓事業を始めたのですが、それでは間に合わないとなると、民間会社を作らせ、ヨーロッパからドレッジャーを入れて、大変なスピードで開田していったのです。1860年代に開始された開田だったのですが、1900年にはこのデルタのほぼ全域を開田しました。海商は見事に巨大米プランターに転身したのです。時代は経済が急拡大していた時ですから、王はそれに便乗して巨大な金を儲けることになりました。植民地国家のネガがあって、そこから焼き付けが始まるなどという恰好ではないようです。

転身の内容を詳しく見ていくと、独自の展開がもっと明らかになってきます。河川流の所有者から、領域を支配する王になるためには、単に経済の問題だけではありません、実にいろいろのことをしなければなりません。王はそのの所を次々にクリアーしていったのです。そして、それはヨーロッパの王がやったような方法とは全く違った方法でやっていたのです。例えば、ここで王の〈帰化〉があったかという、そんなことはちょっと考えられないのです。

具体的に見てみましょう。19世紀の中頃、イギリスが現れた時、タイの王は侵略されてしま

うのではないかと大変心配しました。それで、大馬力で国造りを開始したのです。それを極めて見事にやり通したのがラーマ5世王です。貴族を抑え、絶対王制を確立して、官僚制を整えました。鉄道を敷き、灌漑施設を造って、足腰をしっかりとものにいたしました。このこと自体を〈モジュール〉の導入だったと言ってしまうとそれまでですが、それでは〈モジュール〉の意味はあまり面白いものではないのではないでしょうか。

それから、次の王、すなわち6世王になると、また別のことをやっています。この王は「我らタイ民族」というものを創造し、育て上げたのです。そして、それは「ラク・タイ」という形で、完成したものにされたといわれています[矢野 1990]。このタイ・デルタ世界という所には、原初の昔からタイ族という民族が住んでい、彼等は皆仏教を信じていた、という話を作り上げたのです。そしてその仏教を擁護し、タイ族を守るのが国王であるという理論を作り上げたのです。タイ族、仏教、国王という三つが、がっちりと組み合って国家が作られているという、国家の正統性原理、それが「ラク・タイ」です。6世王はそれを考え出したというのです。こういうことだとすると、これは〈帰化〉などということとはだいぶ違うのではないのでしょうか。

タイでこういうことが起こりえたのは、実はそれなりの歴史的背景があったのです。東南アジアのこの辺りには太古の昔から、極めてしっかりした王国の伝統がありました。それなるが故に、タイの王達はその伝統を用いて国を創造し、強化することが出来たのです。それはこういうことです。

ここには8世紀の昔からクメール王国が厳然として存在しておりました。あのアンコールトムやアンコールワットを建てた王国です。その王はデワ・ラジャでした。シバの化身であり、神なる王であったわけです。その伝統が何百年も続いていました。ヒンドゥーが下火になると、13世紀には南方上座部仏教が入ってきますが、人々の間における「王は神なり」の観念はそんなに簡単に消えるものではありませんでした。かくして、実際には王はダルマ・ラジャという受け取り方をされたわけです。神にして、かつサンガの擁護者という観念がありえたのです。

こういう観念がずっと生き続けて来たからこそ、ラーマ6世はそれを掘り起こし、整理して〈ラク・タイ〉という形に纏めることができたのです。こういうことだとすると、私としてはますます〈モジュール〉を借りてきた、だの、〈帰化〉だのということは考えられないのです。

タイ・デルタ世界には厳然として土地の王国の伝統があったのであった。そして、賢明な王は十分にその伝統を利用したという風に、私としては考えたいのです。勿論、タイの王が伝統の強化だけで国家を運営していったなどとは、私も考えておりません。タイの王は近代ヨーロッパがもたらすいろいろのものに曝され、それをも受け入れていきます。時には王としては受け入れたくないようなものも受け入れざるを得ませんでした。例えば立憲革命だの、民主化だのというものも結局は受け入れていきます。新しい時代の中で生き延びていくためには、そ

れが賢明な方法であると王は知っていたからです。

だから、結局は矢野暢さんのいうように、タイ国は伝統の力と近代の力という、いわゆる二重コード [矢野 1990] の中で生きていくことになったのでしょう。二重コードにはなっているけれど、そこには厳然として伝統の線が一本通っている。その所を私としては軽く見たくはないのです。むしろ、それが心棒だと見たいのです。

IV 東南アジアの特質

国家などを論ずる時には、しばしば王制だの革命だのといった政治の側面に視点を据えて議論がされます。それはそれで一つの見方でしょうが、私はここでは地域研究の立場、すなわち、もう少し泥臭い面も考慮して、私なりの、東南アジアの国と民に対する見方を述べてみたいのです。

IV-1 王国の伝統

ヨーロッパの学者のなかには、まるで、東南アジアには伝統的な国家などというものは全く存在していなくて、国家概念などはヨーロッパ人によって持ち込まれたものであるかの如く考えている人達があります。これでは大変困るのです。それで、ここでは、東南アジアの国家形成史を概観しておきましょう。

東南アジアの国家史は三つのエポックを想定すると理解し易いのではないのでしょうか。第一は王権思想の到来とその在地化の時期です。在地化という点に焦点を絞ると、これは8世紀頃です。第二はその王国がより東南アジア的になる時期で、これは14世紀頃です。第三はヨーロッパの軍艦と大砲が圧倒的威力を発揮するようになる19世紀です。以下、簡単に一通り見てみましょう。

東南アジアには4～5世紀から、幾つかの王国ができます。大抵はインド系の文化を持った人達が港を中心に国を作ったようです。ところが、8世紀頃になると、これらのインド風の王が東南アジア化していくようです。サンスクリット系に混じって、東南アジア系の言葉で書かれた碑文が出てくるのがこの時期です。最も早いものは、スマトラの低湿地からでてくるスリウィジャヤのものです。これは古マレー語で書かれた碑文だといわれています。同じ頃、カンボジアからは古クメール語の碑文が出ます。ここでもインド文化の在地化は起こっていたでしょう。

ところで、8世紀から9世紀になると、幾つかの王国の性格はかなりはっきりしてきます。アンコールトムに、見られるように巨大な石造寺院が建造され、王都の姿もはっきりしてくるからです。また、『通典』などという漢籍から社会の仕組みがかなり判るようになってきます。

どうやら、この頃、こうした巨大な王都を治めていたのはデヴァ・ラジャであったようです。既に先に少し触れた通りです。神なる王の治める国家というのは、こうして、東南アジアには遅くとも8～9世紀には存在していたようです。

こうした強大な古代王国は、一つは大河河口の港市国として、今一つはカンボジアの平原とジャワの火山山麓にあったのです。だが、14世紀になると、その布陣が変わります。旧来のものは新しい生産基盤の出現で相対的に後退させられたからです。新しい生産基盤というのは大平野でした。そこでの米作りとそれに伴う人口増大が、新しい政治地図を作ることになったようです。この時、出現する代表的な国家がアユタヤとマジャパヒトということになりそうです。

この14世紀の大平野の出現は域外の政治・経済情勢の変化と関係していたようです。この時はイスラーム世界の第二の大展開の時期に当たっていました。インドや東南アジアがイスラーム経済圏に組み入れられることになったのです。大平野の開拓はそれを受けて行われたのでしょう。この時には南方上座部仏教圏の拡大も起こりました。こうして、イスラーム教徒と仏教徒が擔う経済は、東南アジア周辺では急激に活発になっていったのです。

チャオプラヤ下流では仏教を採用した王がアユタヤを建てたのですが、この王はスリヴィジャヤ型の森林物産交易を継承すると同時に大平野からとれる米をも集めるようになったのです。ジャワ島のプランタス流域では、マジャパヒトが起こりました。この王国は伝統的なヒンドゥ王国を堅持しながら、その一方で、プランタス流域の開田を推し進めました。そして、海岸にやってきたイスラーム教徒と盛んに取引をした。

この時期以降の数百年をとって見ると、このようにして、東南アジアには三つの型の王国があったわけです。第一はチャオプラヤ下流の新興仏教国アユタヤ、第二はジャワ火山山麓のヒンドゥ王国マジャパヒト、それに第三にはこの二つに比べるとずっと小さい港の小王国群です。群小の港市国の多くは、イスラームの商人王や、在地のダトゥを小王とするものであったようです。

こうした時代が何百年か続きます。その後、ポルトガルが入ってき、オランダが入ってきますが、17～18世紀だと、まだこの構造は基本的には変わっていません。勿論この間にアユタヤの王朝はバンコクの王朝に変わるわけですが、その基本的な性格は変わっていないと思います。この時期、東南アジアはその東南アジアらしさを確実に作っていくのです。

だが、19世紀に入ると、この様子は急激に変わっていきます。結局はヨーロッパの産業革命がこのことを結果したのでしょう。彼等は東南アジアの直接的な経済支配に入ります。

この段階で東南アジアの伝統的王国はあるものは潰れ、あるいは急激に変容していったのです。この後のことは既に現代史でよく論じられている通りのことです。

以上が東南アジアの王国史です。ここで私が言いたいことは、東南アジアには一部のヨーロッパ人達が考えているよりも、はるかに古くから王国の伝統があったということです。伝統

も何もないところに、国家の概念が導入されて、真新しく、主権国家ができたなどというふうには間違っても考えてもらってはならない、ということです。歴史的事実の再確認であります。

IV-2 尖端放電する王

こうして古くから東南アジアにいた王は皆、尖端放電する王だったと私は考えています。ヨーロッパの王などとは全く違うのです。このところを少し説明させて下さい。

このことを説明するためには、宗教的な力の分布の様子が、ヨーロッパと東南アジアでは全く違うということを言うとはっきりするでしょう。

結論から先に言うと、ヨーロッパにおいては宗教的力は天蓋にかかった天幕のように広域に分布しているのですが、東南アジアにおいては、尖端放電しているのです。異形なるものがその先端に超自然的な力を集中させて、強烈な磁力を発散させているのです。図2はその二つの有様を模式的に描いたものです。

図2のAはヨーロッパのもので、ここにはヨーロッパ人の宇宙認識が示してあります。神が上段にい、人間が中段、そして下段に自然があります。人間界はいくつもの小山を作っていて、それぞれの小山の頂に王がおります。伝統的なヨーロッパでは、いわゆる権威というものは二層構造になっていたのではないのでしょうか。上層にはキリスト教の教会が持っていた宗教的権威というものがありました。もう一方は王の世俗的権威です。宗教的権威の方はヨーロッパ全域を、いわば均質に覆っていました。人々は誰も彼もが“天にまします唯一の父”を信じておりました。一方、世俗的権威の方は、封建領主や王が持っていました。こうした王達は武力を持っていたわけですが、それと同時に文化的な権威を持っていました。領民が田舎の地方語を話していたのに王だけはラテン語を話していました。このラテン語は、地方語とは無縁のもので、全てのヨーロッパの王族達の共通言語でしたから、ここに、王達と領民の間にははっ

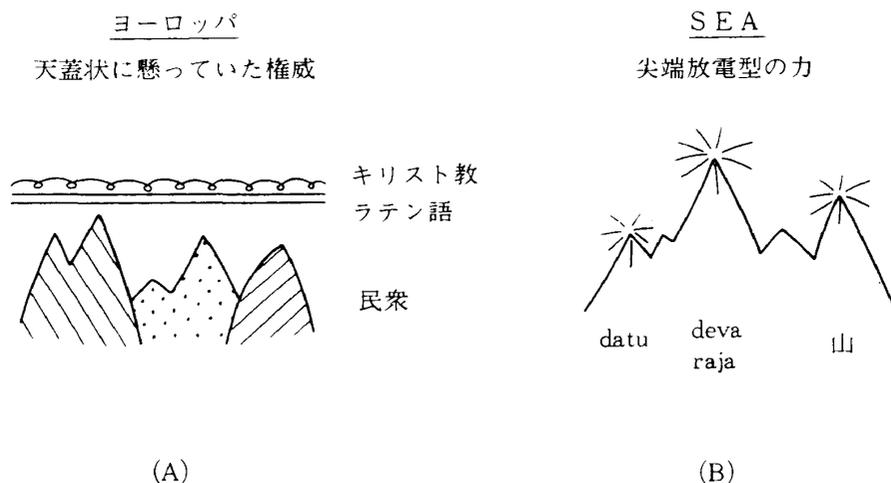


図2 東南アジアとヨーロッパにおける権威のあり方

きりとした断絶があったわけです。

ヨーロッパの構造はこんなものでしたから、アンダーソンの言うあの〈帰化〉現象が起こりえたのです。これは次のようにして起こりました。産業が発達し、経済が膨張してきました。そういう趨勢の中で、弱小の領主達は次々と強い王達に吸収されて行くわけですが、大きくなった王の方では、新事態の中で国を経営していくために経済に明るい官僚群を作らねばならなくなりました。多くの優秀な人材を王族以外から選ばねばならなくなりました。だが、こうなるとラテン語に固執しているわけにはゆきません。地方語を話す一般人を登用しなければならなくなりました。一般人の登用が増えると、地方語を官僚語にしなければならなくなりました。やがて、地方語文化が広がることになるわけです。こうした状況の中で、国の運営を能率よくやっいていこうとすると、結局のところは、王家も密室的なラテン語にこだわっているわけにはいきません。生き残りを考えた王は、ここでラテン語世界から地元語世界への“帰化”をしたという次第です。

これがアンダーソンのイメージしている国民国家形成のプロセスの主要な一つのステップなのです。

ところが、東南アジアにはこんなものとは全く違った世界が広がっているのです。

図2のBはその東南アジアの模式図です。

東南アジアは、いわゆる汎神論の世界です。ここにはキリスト教世界が持っていたような一元的な権威が、まるで天蓋をなして存在しているといったような図は存在しません。実に様々なものが、それ独自の霊力を発して林立しているのです。山頂が宗教的権威を備えて聳えています。古木にも、苔むした大岩にもカミが宿っています。もっと小さい草木虫魚にもカミガミは宿っているのです。そうした中で異形のものには、より強力なカミが宿っています。これが汎神論的世界なのです。そういうものの一つとして、王や酋長がい、その王や酋長にもカミが宿っているのです。

富沢寿勇 [1990] はフィリピンのダトゥのことを論じて次のように言っています。ダトゥは武力などという点では決して強くない。むしろ、慣習法に精通して、平和推進者であり、争いの仲裁者である。そして、その「ダトゥの知恵の源泉はトゥマノドと呼ばれる聖なる精霊で、ダトゥにだけつく特別な精霊であり、彼がダトゥとして行動する時に、知恵と知識を与える」ものである、というのです。

東南アジアには、山や川、草木虫魚など自然界のものであれ、人間であれ、およそ異形なるものには精霊がとりつく、と、そういう宇宙観があるのではないのでしょうか。集落の中でダトゥは異形なものです。だから精霊がつくのです。王はもっと巨大な異形なものです。だから、もっと巨大な精霊がくっつくのです。天蓋型の超俗性の認識に対して、私などは東南アジアには尖端憑依型あるいは尖端放電型の超俗性を感じざるをえないのです。

異形をなす尖端からある力が四周に発散している。それは磁極の近くでは全てをそれに惹きつけずにはおかない強烈なものですが、磁極から遠ざかるとその引力は弱くなっていく。いわゆる圏型の場ができていくわけですが、そうした磁場が、いくつもいくつもあっても、その性質が皆違う。プノムと呼ばれる磁石の力があれば木魂もある。酋長の持つ力もあれば、デヴァ・ラジャが持っている力もあるという次第です。

東南アジアがこういうものだとすると、その組織の在り方はヨーロッパの場合とは基本的なところで違うということになるわけです。王の〈帰化〉などという発想はそれ自体、全く的外れという気がせざるをえないのです。

IV-3 二重コード性

〈帰化〉などということは東南アジアの王達は全くしないで、その代わり、矢野暢さんの言う〈二重コード〉ということをやると、ということになるのではないのでしょうか。古くからある伝統のコードは、そのままの性質を消しえないで存在する。しかし、同時に新しい考え方も取り入れる。新旧二つの考え方は糾える縄のごとく、絡み合い、〈二重コード〉をなすというものです。

矢野さんはシャム王国を例にして、この〈二重コード性〉を論じているのですが、それは先にタイ国史を通覧して確かめてみた通りです。いささかくどいようですが、もう一度見ておきましょう。

8世紀段階ですでに、この近くにはクメールのヒンドゥ王国がありました。その王は神であったわけです。そういう世界の中で、14世紀には大平野の開拓があり、アユタヤ王国が作られたのです。新しい王国は仏教を奉じたのですが、古代からの伝統は否定できませんでした。王はダルマ・ラジャとして受け取られることになったのです。ヒンドゥ時代と同じように、王は、巨大な尖端放電をしていたわけです。全く同じことは、もっと時代が下って、バンコク王朝に入っても認められています。バンコク王朝の出自はそれほど高貴なものであるとは決していえないのですが、その王朝が隆盛に向かうと、そこには精霊がとりつき、放電を始めるのです。バンコク王朝の王もダルマ・ラジャになりました。

すでにここには尖端放電するラジャと仏教の二重コードが見られるのですが、後には、もっと新しい二重コードが見られます。それが矢野暢さんの議論する〈二重コード〉です。矢野さんは、バンコク王朝が20世紀に入ってとった経国の姿勢を捉えて言っているのです。ラーマ5世がとった官僚機構の整備や鉄道建設は近代という外来のコードです。一方、ラーマ6世の作り上げた〈ラク・タイ〉は伝統という自前のコードです。これが両々相俟って、今日のタイ国はできている、というのが矢野さんの見方です。私はこの見方は正しいと思います。

このような見方をする時、インドネシアは、どのように考えたらよいのでしょうか。

IV-4 故郷とエリート

話はガラッと変わりますが、体験的エリート論をさせて下さい。東南アジアでも似たようなことがあるのではないかと、思って話題にするのです。エリートというのは故郷とは極めてしばしば乖離し、時に故郷と敵対するものになるのではないのでしょうか。また一方では、故郷に錦を飾るために無理な行動をとることもあるのではないのでしょうか。こういうことは特に農村出身のエリートの場合は強烈に起こるのではないのでしょうか。エリートのもつ、この不安定性を見てみたいのです。

私の場合だと、こういうことです。私は故郷がいやでした。その貧しさや、不合理な因習がたまらなく、何とかしてどこかに逃れたいと思っていました。外にはもっと良い世界があるに違いない。だから、勉強をして、ここから飛び出し、新しい世界で生きてみたいと考えていたのです。新しい世界に飛び出して、立派になれば、故郷の人達も私を認めるだろうし、ひょっとすると、私は故郷に良いことをすることになるかも知れない。そんな気持ちで私は故郷を飛び出したのです。

しかし、その後起こったことは必ずしもそう一本調子のもものではありませんでした。実際に町住みをしてみると、数十年の時間の中で、私は変化していきました。その変化はごく単純化してみると、次のような三段階であったと思います。

第一段階は少年の夢だけを持って、新天地に生きた時代です。生活は潑刺としていました。

第二段階は故郷のことが気になりだした段階です。具体的にいうと、父母が困っていることが気になりだしたのです。本来ならば、もう私自身が家を代表して、近所付き合いや親戚付き合いをしなければならぬのに、それをしないから、両親が大変肩身の狭い思いをしているということが、ひしひしとわかるようになった段階であります。しかし、この時期、私は、それを受け入れませんでした。むしろ逆に、私の生活はますますラディカルになっていきました。ラディカルというのは両面に向かってです。一つはより徹底して、新世界を求めるという方向でした。それと今一つは、「故郷に錦を飾らねばならぬ」という方向でした。この時期の私は、分裂的な状況にあったということができましよう。

第三段階は、その分裂がある種の収斂へ向かう段階です。これは現在の私自身の状態で、事態は目下進行中ですから、いささか述べ難いのですが、言ってみれば一種の発見とそれに続く納得の段階ということになります。故郷の因習も悪い点ばかりではない。むしろ、積極的に評価すべき点が多々あるではないか、という発見があったわけであります。これは、新天地にこそ良きものがある、と期待していたことに対する、期待はずれといっしょになっていると、いってよいかも知れません。町の生活でのむき出しの欲望や寒々とした人間関係を見た後では、田舎の因習が俄然、かけがえのない安全装置のようにさえ見えてきたからなのかも知れません。今では私は、次のように考えています。現実の生活には常に両面があるのだ。苦痛に見える面

と快適に見える面、悪と見える面と善と見える面、その両面が剥がし難く密着しているのが世の中の常というものだ、それが文化というものだ、とそんな風に考えているのです。

私は今では自分の故郷の文化をそれほど最高のものとして持ち上げたりしたくありません。しかし、だからといって、価値なきものとして切り捨てようなどとはさらさら考えていません。それはそれなりの表と裏を持ち、それなりの存在価値を持っている。だから、永続すべきものだ、と考えています。ある時には、そこにいる当事者は相当大きな苦痛を感ずるかもしれませんが、しかし、その中で生きていくべきなのです。何故なら、それが、生きるということであり、普通のことだから、ということです。

ところで、ちょっと周りを見渡してみますと、全ての人達が、私が苦しんだと同じようには苦しんではいないことに気付くのです。一部の人達にとって葛藤は極めて強烈です。だが別の人達にとってはそれ程でもないらしい。そして、この差は、個人の資質というよりも、むしろその人が出てきた故郷の差によるように私には見えるのです。私は近江の産なのですが、近江のように固有文化ががっちり築かれている所と、見知らぬ人の混住している都会のような所とは、大きな差がある、という風に私には見えるのです。

利発であったが故に田舎を出てしまったエリートの立場というのは、えてして実に微妙なものです。彼は彼自身の変身の段階で、いろいろの故郷観を持ちます。そしてそれを告白的に表明したりします。だが、それは、彼の故郷観であり、実態では必ずしもないのです。実のところを言うと、そういう彼の独白とは別に、故郷は厳然として、それ自体のものとして存在し続けているのです。それは、太古より不変だなどとは言わないまでも、極めてゆっくりとしか変わらない、いわば、宇宙の摂理にしたがって、悠然と生き続けているものとして存在しているのです。そういう故郷が確かに一部の所にはあるのです。私は〈世界単位〉のなかで、〈生態適応型の世界単位〉というのを、一つの類型としましたが、そこには、今ここに言っているような故郷が存在しているように思えるのです。

私がここで、故郷のことを特に持ち出したのは、ジャワのことを考えてのことです。

V インドネシアを考える

土屋さん、あなたは、スハルト時代になってインドネシアは硬直化した、今こそ知識人が真剣に考え、もっと発言すべきだ、と言っています。私も賛成です。私なりに、今のインドネシアを見て、インドネシアはどうあるべきかについて発言させていただきます。それを言うためには、インドネシアの地理的、歴史的背景を少し見ておかねばなりません。

V-1 二つの世界

インドネシアは私流にいうと二つの〈世界単位〉からなっています。ジャワ世界と東南アジア海域世界です。前者は火山山麓に住む農民の作る世界であり、後者は海岸で森林物産採取や交易に携わる海民の作る世界です。このことはすでに述べたから、繰り返す必要はないでしょう。ただ、ここで、もう一つ思い起こしておかなければならないことは、ジャワ世界は農民世界と言ってはいますが、そこには強烈な尖端放電をする王がいたということです。ここは伝統に満ちみちた王国でもあったわけです。

海域世界にも尖端放電する港の小王達や森林物産採取集落のダトゥ達はいました。ただ、その磁力はジャワの大王のそれに比べると、はるかに小さいものでした。小さな灯台のように点在しているそうした中小の明かりを頼りに、採取者や交易者が動きまわっていたのです。こうして、海域世界は人々が流動し、混住する場でした。

インドネシアを論ずる場合には、何よりもまず、この二つの世界の存在のことは最低限おさえておかなければならないことではないでしょうか。

V-2 二つのエリート

このジャワと海域の対照はエリートについても言えます。

植民地時代に入ると、多くのヨーロッパ人がやってきました。港が大きくなり、港には混血ができました。そうした港の中で、最大のものが、バタビアであり、ここには、多数のバタビーができたのです。一方、ジャワの農村部はこれらに比べると、閉鎖的であり、在来の文化を守り続けました。

いわゆる〈想像の共同体〉を作り上げるエリート達は、こういう、背景の中から生まれてきたのですが、私はこのエリートのなかに明瞭な二種の人達を見出すのです。海域出身のエリートとジャワ出身のエリートという二種です。

このことに関しては、あなたの『インドネシア——思想の系譜』は実に面白い資料を示しています。「ロンゴワルシトとカルティニ」[土屋 1994: 54-82]、それと、「スカルノとハッタ」[同上書: 109-169]の対比がそれです。ロンゴワルシト(1802-73)はジャワ王家に仕えた最後の宮廷詩人で、ジャワ王家の栄光とジャワ人の魂を、ジャワ語で語り続けた人ということです。この人は今もジャワ人の心の中に生き続けている、とあなたは言っています。一方、カルティニ(1879-1904)は、ジェバラ県知事の娘です。オランダ語を学び、それに習熟して、オランダ語で友人達に多くの書簡をしたためました。

そのカルティニについて、あなたは次のように言っています。

書簡集に描かれるジャワの風景は、絵葉書のように、芝居の書割りのように美しい。紋

切り型的美辞に近い。それらは、彼女が耽読したであろうオランダのおとぎ話の中の幻想の風景のように、澄明で美しく、リアリティを欠いている。それは、過剰な熱気と湿気の底でゆらめいているジャワの現実の風景からははるかに遠く、一連の決まり文句（クリシェ）によって表現され、普遍的な美しさを持ち、あまねく存在する風景、肉体性を欠落させた風景であるといつてよい。だが彼女は、それこそがふるさとの風景だといひ切る。風景がこのような観念性において捉えられたのち、それがかけがえのない〈ふるさと〉の風景とされるのである。

ジャワの文化史上初めて提示されたこのような〈風景〉を通して、カルティニの精神は近代民族意識の原点に到達していたといえよう。何故ならば、このような風景こそ、後の人々が同調してやまぬ「うるわしのわが祖国」という共同体観念の核心をなしていたからである。[同上書：79]

ロンゴワルシトはジャワの核心域スラカルタに住んだのに対して、カルティニはジャワの北海岸ジェパラに住んだのです。ここに私は伝統そのものに生きた内陸のエリートと、新しい文化に生きた海岸のエリートの違いを明瞭に見るのです。

似たような対比を私はスカルノ（1901-70）とハッタ（1902-80）のうちにも見るのです。スカルノは民衆を鼓舞する時、よくワヤンの中の人物を持ち出して、「民族の魂」に訴えました。すると、ハッタはそれに対して、「それに酔いしれる民衆とは membebek（アヒルの行列）」[同上書：159] だと言って文句を付けました。ハッタは、民衆はもっと理性的になり、本当の意味で目醒めるべきだというのでしたね。

ハッタよりももっと徹底した合理主義者だったシャフリルが、そのハッタについて述べています。「心の中は、彼はオランダ人であった。という意味は、彼は植民地支配者を、心底から外国人であり、また敵であると見なしていたのではなくて、例えば、オランダ政府に対決する際の左翼社会主義者のような見方で植民地支配者を見ていたのである」[同上書：158-159]。

ブラントスの上流ブリタルで育ち、ジャワ人エリートの薫陶を受け続けてきたスカルノと、青春の10年間をオランダで過ごしたミナンカバウ人ハッタの違いを私はここに見るのです。同じような違いはジャワ貴族のデワントロとスマトラのナタル生まれのアリシャバナの間にも見出すことができます。

インドネシアという〈想像の共同体〉を目指したエリートの中には、混血のユーラシアンから、海域出身のエリート、内陸ジャワ世界出身のエリートまでの幅があったということを考えておきたいと思うのです。ユーラシアンは除外するとしても、私はここで海域出身のエリートとジャワ出身のエリートは峻別しなければならないのであろうと思うのです。

極めて粗っぽく言ってしまうなら、ジャワのエリートは重いジャワの故郷を引きずるエリー

トであり、海域出身のエリートは軽々として弾力にとんだ世界に生き続けられるエリートなのです。

V-3 〈想像の共同体〉の実態

共通の敵が目の前にいる間は、全てのエリート達は共闘することができたでしょう。しかし、その共通の敵が消えた後も、彼等はまだ共闘しえたのでしょうか。〈聖なる空間〉〈かけがえのない空間〉は植民地国家というネガがあったからこそ、そこから出てきたのだということは、その通りなのですが、ひょっとすると、そのネガが消えた後には、ポジもまたいつの日か色褪せ、もう焼き直しができないような状況が起こるのではないのでしょうか。あるいはまたこのことは、次のように言うこともできます。海域出身のエリートにとっては、植民地勢力が作ったネガは彼自身のネガであったでしょう。だから、それはいつもポジに焼き付けることができました。だが、ジャワ出身のエリートにとっては、もう一つ別のより強烈な、より持ちのよいネガがあって、時間の経過と共に、その持ちのよいネガだけが残る。結果として起こることは時間が経つと、海域のエリートとジャワのエリートの作り出すポジは違ったものになる可能性が大きい。そういうことになるのではないのでしょうか。

現実に起こっていることはそういうことなのかも知れないのです。インドネシアはもう独立を獲得しました。そればかりか、開発の時代は成功裡に進んでいます。独立を戦った時とはもうすっかり状況が変わってしまっています。組織などほとんどなかった所から、今では官僚組織はほぼ完璧なものになり、経済的繁栄も謳歌しています。結構なことが多いのです。しかし、こうした中で、その反面では“制服の氾濫”〔白石 1986〕や、“エスニシティの飼育”〔加藤 1993〕が起こっています。土屋さんのいう、いわゆる「知の逼塞状況」〔土屋 1994〕が起こっているのです。

この息づまりそうな状況をどう考えたらよいのでしょうか。これでもまだ国家は〈想像の共同体〉というふうに言うべきなのでしょう。

こうなってしまうと〈想像の共同体〉は、少なくとも、もうあの独立闘争の時のような恰好では存在していないと考えざるをえないのではないのでしょうか。エリート達の多くは固く口をつぐんでいます。だが、実際には皆、心の中では、自分の故郷のことを考えているのです。このことは至極当然なことだと思います。

私はエリート達を非難するつもりはありません。皆、自分に忠実なのです。自分が生まれてきたタナ・アイルに忠実なのです。間違っているのは、そのタナ・アイルを国家だと異訳し、〈想像の共同体〉があるのだ、などという幻想を抱かせ過ぎた所にあるのではないのでしょうか。それは、かけがえのないものだから、人々がそれに命を賭けるなどという公式すぎる解釈をしている所に誤りがあるのではないのでしょうか。

むしろ、私達は、最初からもう一度、〈想像の共同体〉というような発想法を考え直すべきなのでしょう。まるで、何の伝統もない所に、ヨーロッパで発明された〈モジュール〉が到来して、それで新しい共同体にできるなどという考え方自体を見直してみる必要があるのではないのでしょうか。私達の住む、このアジアには固有の風土があり、固有の伝統的な共同体がちゃんと大昔からできてしまっているのです。そして、結局私達はそこから外れていくことはできないのです。

〈世界単位〉というものが大昔からある。そして、その上に国民国家という流行の思想が到来したということを十分に認識しておくことが必要なのではないのでしょうか。繰り返しになりますが、インドネシアの場合だと、ジャワ世界という保守的自己中心的な世界と、海域世界という反構造的、開放的な世界があるということです。そのことをまず何よりも先に認めておくべきなのでしょう。それらが、一つの国家を作るなら、この事実を認めた上で国家を作ることを考えるべきだと思います。

複数の世界、とりわけ陸の世界と海の世界が、お互いに話し合いながら一つの単位をつくっていかねばならないというのは、今や汎世界的な要請であろうかと思います。中国はまさに、今、このことを極めて大きな規模でやっております。

日本はかつて、この問題で苦しみました。近い将来、またもう一度同じ問題で苦しまねばならない可能性が大きいと私は思います。

陸の世界と海の世界は、私流にいわせてもらおうと、自形の世界と他形の世界〔高谷 1994〕です。本来これは全く異質な〈世界単位〉を作るものなのですが、それが一組になって、初めて地球世界はうまくいくのです。インドネシアの場合もまさにその通りなのです。より広い範囲での統合、いわゆる地域統合などということが議論されるようになった今、この問題は、最も大事な問題の一つとして議論されねばならないのでしょうか。

独立して主権国家を克ち得たこと、そして、その主権国家は〈聖なるもの〉〈かけがえのないもの〉であることは認めるのですが、それがただ単に、政治社会学的な分析だけで〈想像の共同体〉などとして、処理されてしまうことに対しては、私は地域研究者としてはいささかの異論を述べざるをえないのであります。

引用文献

- アンダーソン、B. 1987. 『想像の共同体——ナショナリズムの起源と流行』白石 隆、白石さや（訳）。リプロポート。
加藤 剛. 1993. 「飼育されるエスニシティ」『地域研究のフロンティア』矢野 暢（編）。弘文堂。
コナー、ウォーカー. 1995. 「エスノナショナリズム」石川一雄（訳）。『思想』1995年4月号。岩波書店。
白石 隆. 1986. 「学校唱歌、制服、ドラキュラ」『東南アジアからの知的冒険』原洋之介（編）。リプロポート。
高谷好一. 1993. 『新世界秩序を求めて』中公新書。

- _____. 1994. 「世界のなかの〈世界単位〉」『世界単位論』矢野 暢（編）. 弘文堂.
- 土屋建治. 1990a. 「〈想像の共同体〉としての国民国家」『東南アジア学的手法』矢野 暢（編）. 弘文堂.
- _____. 1990b. 「知識人論」『東南アジアの思想』土屋建治（編）. 弘文堂.
- _____. 1994. 『インドネシア——思想の系譜』勁草書房.
- 富沢寿勇. 1990. 「王権観念の原理と諸相」『東南アジアの思想』土屋建治（編）. 弘文堂.
- 矢野 暢. 1990. 「〈政治〉の成立」『東南アジア学的手法』矢野 暢（編）. 弘文堂.